

七賢酒蔵

山梨県は清らかな水が豊富にあるため、酒造メーカーや大手飲料メーカーにとっては絶好のロケーションです。その中でも、山梨県で最も歴史のある酒蔵の一つである「七賢」。七賢は、1750年の創業以来、北原家の代々続く家業です。

何百年にもわたる醸造技術を持つ七賢の酒は、酒鑑評会で数々の一等賞を受賞しています。全国的にも高い評価を得ています。

七賢の由来

高遠藩（現在の長野県信州）出身の酒豪、北原伊兵衛が1750年に創業しました。高遠から江戸によく足を運び、ある夜、山梨に泊まりました。この地の水を飲んでみて、全国でも類を見ない清らかな水だと確信したそうです。その後、甲州の地で酒造りを始めました。

天保10年（1835年）、五代目北原伊兵衛は高遠藩大名・内藤頼寧から、竹林の七賢人の肖像画が描かれた手作りの欄間を贈られました。伝説によると、七賢人は中国の三国時代（紀元3世紀）に政治的緊張から逃れるために酒を飲み、詩を書いたとされています。竹林の七賢者は「竹林の七賢」と呼ばれており、酒名の由来となっています。

革新の伝統

日本では、アルコール産業の競争が激化しています。ビールやワインをはじめ、蒸留酒やリキュールの種類も増え、1750年当時とは比べ物にならないほど消費者の選択肢が増えています。市場の一步先を行くために、七賢は常に新しい醸造方法を取り入れ、醸造方法を革新していかなければなりません。

その努力が実を結び、2017年には東京で開催された日本酒のコンクールで一等賞を受賞しました。七賢の酒は高い評価を得ています。

山梨の水の純度

現在の十三代目社長は北原対馬、現蔵元は北原亮庫。七賢の醸造方法の詳細は明かされません。しかし、北原対馬は「七賢の酒で一番大切なのは水だ」と認めています。

山梨県の水の多くは、川や小川の水をそのまま飲むことができるほどの清らかな水です。

"ワイン造りといえば、ぶどうが優れているところが一番いいんです。しかし、日本酒の場合、米と水の比率は大体米20%、水80%。だから、酒を造るには米が一番いいところではなく、水が一番きれいなところがいい"と北原さんは言う。

山梨の歴史や宗教神話において、水は重要な資源であり象徴であり、その意味は今も続いています。

七賢ツアーと日本酒の試飲

七賢では、醸造施設や博物館の見学ができます。ご希望の方はご予約をお願いします。営業時間内であれば、少額で日本酒の試飲会に参加することができます。ギフトショップでは、七賢の日本酒などを販売しています。